

平成28年12月20日

あきる野市議会議長 殿

会 派 名 自由民主党 志清会

代表者氏名 細 谷 功



会派の（ 調査研究 ・ 研修 ） 報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成28年12月17日（土）～ 平成28年12月18日（日） 1泊2日
2 調査研究または 研修の場所	島根県大田市大森町（石見銀山） 空き家古民家の活用・運営方法の調査
3 調査研究事項 または研修名	1日目 大森町（石見銀山）の古民家・街並み調査 群言堂（石見銀山生活文化研究所）のイベント調査 他別紙のとおり 2日目 古民家を行政による文化財活用と民間企業による観光活用の比較調査 他別紙のとおり
4 参加者氏名 （ 1 名）	中嶋 博幸
5 調査研究または 研修の概要及び 感想等	別紙のとおり



視 察 報 告 ・ 研 究 研 修 報 告

1 視察または 研究研修日	平成28年12月17日(土) ～平成28年12月18日
2 視察場所または 調査研究名	○ 島根県大田市大森町(石見銀山) 空き家古民家の活用・運営方法の調査
3 手 程 行 程	1日目 ○ 大森町(石見銀山)の古民家・街並み調査 ○ 群言堂(石見銀山生活文化研究所)のイベント調査 ○ 群言堂経営の古民家宿舎・阿部家の調査 ○ 群言堂経営者(松葉登美 氏)へのヒヤリング 2日目 ○ 古民家を行政による文化財活用と、民間企業による観光活用の比較調査。 ○ 石見銀山商店街店主へのヒヤリング調査。
4 ☐ 視察地概要 ☐ 研究研修概要 (1) 島根県大田市大森町(石見銀山)の歴史と概要 戦国期から江戸中期にかけて世界有数の銀山採掘地として栄えた街。 銀鉱山にかかわる遺跡は、その集落も含め自然環境と一体となった文化的景観を形成し、環境に配慮し自然と共生した土地利用が今に伝えられていることが評価され、2007年に文化遺産に登録された。 (2) 研究概要 当市には山間地区があり、空き家が増加している。それら地域は高齢化率が高い地区でもあり後継者も不在でお年寄りのみの世帯が多く、近い将来さらに空き家が急増する可能性が極めて高い。 一方で暮らしの価値観も変化し、自然豊かな山間地で暮らしたいというニーズも多いため、養沢活性化委員会では空き家部会を創設し、地域ぐるみで空き家の有効活用化を促すよう活動をしている。 そのような中、地域のシンボリックな建物である立派な民家が長年空き家になっていたが、空き家部会からの問い合わせなどの影響もあり、提供し活用しても良いような回答も得られはじめた。 空き家の利活用策を研究するため、古民家の活用が活発に行われている大森町を視察し、活用事例や課題などを研究する。	



養沢の旧谷合邸（現在空き家）

（２） 考察

① 街並み調査

一般庶民の民家や豪商民家が混在し江戸時代の街並みがそのまま残っている。

地域住民がこの街並みに誇りと愛着をもち残り続けた。

世界遺産地区であるため、観光客が多いのかと思ったが閑散期でもあるため人通りはほとんどない状態であり、店舗も思いのほか少なく、ところどころにごく数店ある程度であった。

あまりひとの気配がないので、散策ガイドに「これらはみな空き家なのか？」と聞いたところ「間口は狭いが奥行きが長い家なので、通り添いは観光客の目につくため生活圏は奥の方なのだ。ほとんどの家が商店など行わず普通に暮らしている」とのことだった。また「世界遺産とは観光地ということではないのだ。その暮らしや街並みなどを地域ぐるみで誇りをもって残しているものであり、それに対しての評価であり、観光地にしたいがためだけにやっているのではない」とも言われた。

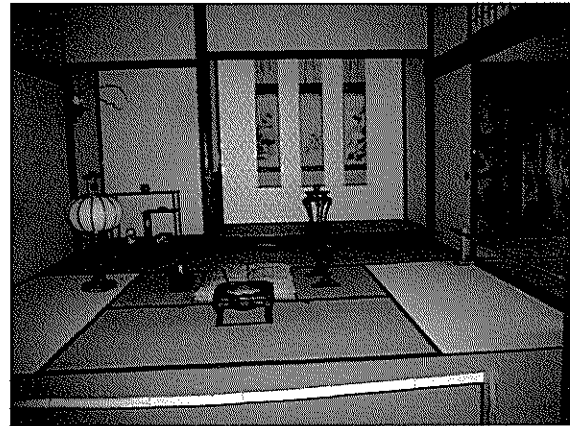
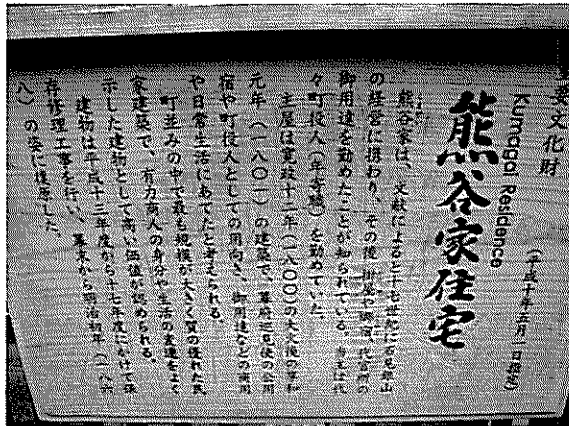


蕎麦屋の店主に聞いたところ「世界遺産になった２～３年はものすごい数の観光客が押し寄せたが、いまは５月連休、夏休み、秋の行楽時期以外はあまり来訪者ないのが現状。世界遺産になったときはかなりの数の店舗開業者もいたが、ほとんどが２～３年で撤退した。うちは繁忙期のみバイトを使うが閑散期は徹底して夫婦のみ

で切り盛りしている。閑散期が多いため、そのようにしないと持続経営できない」
とのことだった。世界遺産だから、銀山があるから、こんな素敵な街並みがあるから、だけで人がくるというものではない、という現実を目の当たりにした。

出雲空港からローカル線の電車、バスを乗り継いで 2 時間近く掛かるアクセスの悪さを体験した後、この閑散ぶりをみたとき、あきる野市のほうがよほど恵まれた観光地ではないか？と感じた。

街並みの中に市が保有し指定管理制度にて拝観料を徴収している豪商古民家も数件あり見学した。



建物といい、様々な家財など大変立派であり、当時の繁栄ぶりも垣間見ることができたが、立派な古民家は日本全国どこにもあり「この民家がみたくてこの地を訪れるということはないのでは」とも感じた。また、これらに復元するための改修費も億単位、指定管理料など維持費も相当に有することが容易に感じ取れた。「家の女達」という女性グループが指定管理を受けており話を聞いたがやはり「とても拝観料だけでは指定管理料を賄うことはできない。伝統文化を継承するための施設である」とのことだった。

あきる野市五日市地区にも古民家文化財として市倉邸があるが、商店街のなかにあり、となりに郷土資料館もある立地条件で、しかも無料でありながら拝観者は少ない。それらを考えると立派な民家が養沢など山間部にあったとしても、これらと同様に文化財的な活用方法では、付加価値を見い出せない用途になってしまうと感じた。

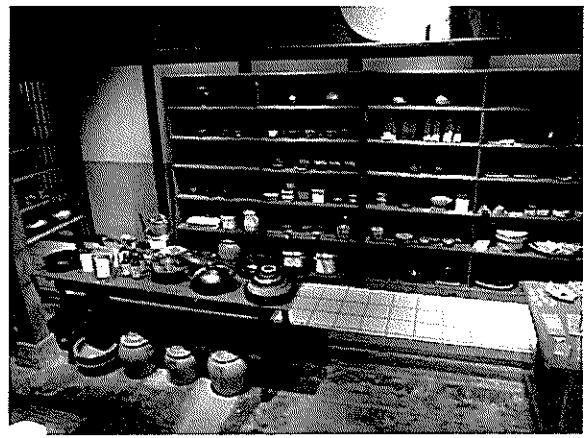
② 活用事例調査

街の中には閑散期などきにすることなく古民家を活用している元気な企業が 2 社ある。自然繊維を活用したアパレル企業「群言堂」と、義足メーカーの「中村ブレイス」である。

2 社とも創業者（いまでも健在）がこの大森町の出身者であり、両者ともマスコミにも取り上げられるほどの、知る人ぞ知る「若い世代に人気のある企業、人材養成にも特徴のある企業」のカリスマ経営者である。

大森町の中の古民家をこの 2 社で 60 戸保有しており、店舗、宿泊の用途の他に社員の社宅としても活用しており、大森町に空き家は少ないという。

また、この町の人口の3割くらいをこの2社の関係者が占めていることもあり、また群言堂は社員平均年齢36才ということも影響し、町内に唯一1園ある保育園が一時期園児が少なくて閉園になりそうだったが、今年は待機児童が発生しそうになった。この2社の地域貢献度は計り知れない。



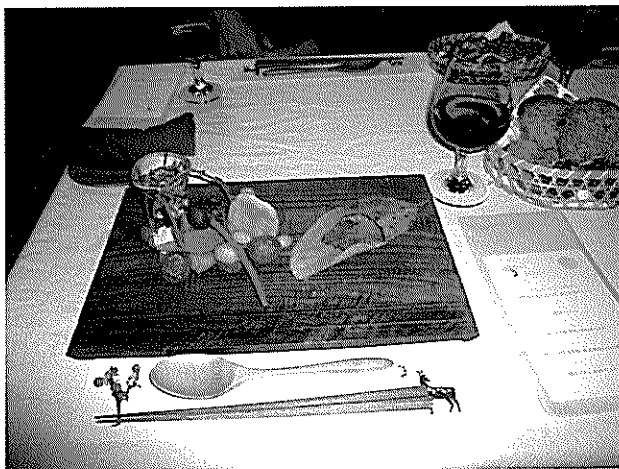
群言堂本店・店舗内部

アパレル企業であるためデザインには拘っており、大変お洒落である。

閑散期にこの店舗への来場者は少ないが、この大森町を本店として商品開発やイベントなどを行い、販売は全国展開している。

この日は夜に本店で「森の生き物と食」をテーマにワークショップと食事会が開催され約30名の方が地域内外から参加した。

ダイレクトメールやSNSなど情報発信を頻繁に行っており、リピート客やファンも多く、ワークショップを開催の案内を流せばすぐに定員に達するそうだ。



ワークショップ後の懇親会食事会には「森の生き物と食」のテーマにふさわしくシカ肉のジビエ料理と地元食材でのおもてなしと、ワークショップ参加者が交流しながら行う懇親会が楽しくて参加しているリピーターも多かった。

お洒落、グルメ、ヘルシー、そしてアパレルが本業ということもあるのだろう、圧倒的に女性客が多かった。

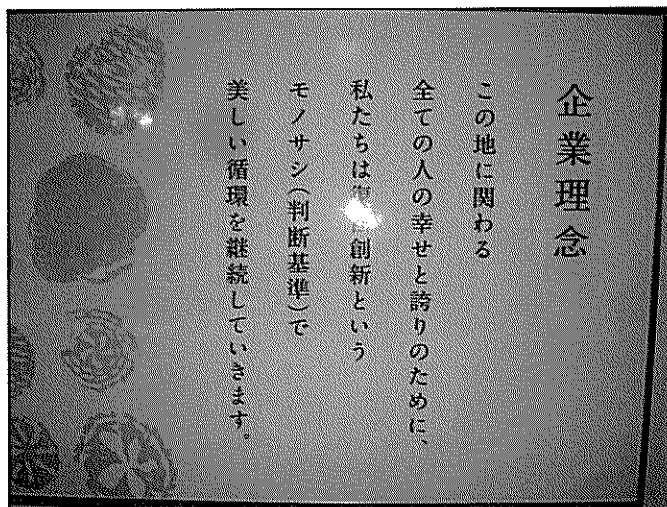
ワークショップだけでは経済効果がないが、食事会をセットで行うことにより、しっかりと売り上げに貢献していた。

群言堂の宿泊施設である「阿部家」にて経営者である松葉登美氏とも対談した。

安部家は築 227 年の旧武家屋敷であり、廃墟化していたものを購入し 17 年の歳月と 8 億円を投じて修復し、経営者の住まい兼、宿泊施設として活用している。



松葉夫婦は、夫のふるさとであるこの大森町へ 35 年前に一軒の小さな古民家へ移り住み、最初は裁縫による小物からスタートし、アパレル企業へと転身しながら業績を伸ばしてきた。その間に縁あってこの阿部家を譲り受けることになり現在に至る。自然と調和した日本の古き良き暮らしを大事にすること、残すこと、次世代に継承することに人生を掛けているといっても過言ではない。



企業理念は「復古創新」

この阿部家は金儲けのためではなく、伝統日本家屋を残す使命感とご縁を感じ購入した。当時ゆとりある財務力ではなかったが、借金しながら少しずつ修復してきた。現在は「日本の暮らしを活かして伝える用途として」宿泊施設として活用し盛況であるが、この松葉夫婦と宿のスタッフとお客で晩さん会的に行う「夜食」がこの宿一番の人気である。

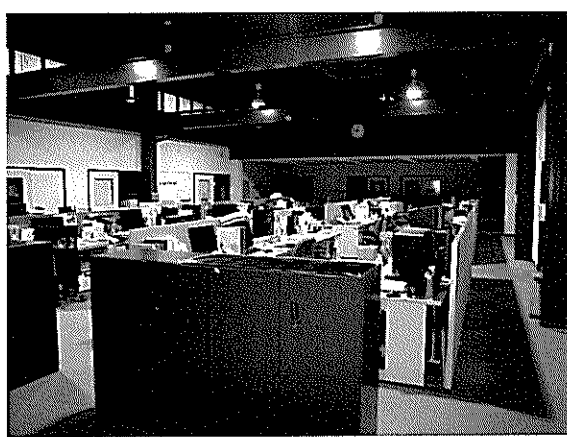
単なる古民家利用ではなく、「地域のヒトとの交流や素朴な暮らしの体験」を求めている人が多いのだとも感じた。

「行政主導で拝観料をとって単なる見学の館にするのは一番ダメな使い方。地域の暮らしを活かせる使い方をして且つ、経済的にも持続していけないとダメ、特に由緒ある建物は使う人が覚悟をもって、リスクも背負って、責任をもって管理しないと魅力もないし、持続した維持管理もしていけない」と力説していた。

この宿では夜食も朝食も地域の食材を活用し、彩りも鮮やかで大好評である。



翌日、事務所とアトリエの見学もさせてもらった。



ここで50名が働いており、その大半が人口300名の大森町に住んでいる。家族も入れたら相当な人数が住んでいることになる。

カンブリア宮殿に群言堂の取り組みが放映されたことも大きかったそうだが、この秋に数名社員募集をしたところ、全国から90名の若者から応募があった。優秀な人

材が多かったとのこと。

仕事のやりがい、山間部の暮らしに価値観をもつ若人は多いのであり、暮らしの価値観にも変化が生じていると思われる。

当たり前だが、雇用先があるということは定住化に非常に大きな影響力がある。徳島県神山町などでは本社が都会にある IT 企業が、自然環境良い民家で仕事や暮らし環境を創出し空き家利用が活発にされているが、この大森町では 2 社の魅力ある企業が中枢機能をこの地において人材育成も兼ねた取り組みをしている特異性のある事例だった。

単なる空き家利用だけではなく、どんな地域にしたいのか？すべきなのか？地域の特徴を生かし暮らし方も提言した地域づくりと発信力が必要であるとも強く感じた。

ネガティブにみれば山間部は不便であるが、ポジティブにみれば、観光としての要素、働き方の要素、空き家の使い方もアイデア次第で多彩である。

「ヒト」「体験」「食」が支持され、リピーターを生むポイントであると今回の視察で強く感じた。

あきる野でもこのジャンルならできると感じたし、それが出来うる人材も頭に浮かんでもきた。

--